
黒い恋

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い恋

【Nコード】

N2584B

【作者名】

いちご

【あらすじ】

私の恋愛遍歴を元に、恋愛小説（連載です）を書きました。友達に「ドラマになりそうだね」と言われるくらい、濃い恋愛をしています。呆れるかもしれませんが、読んでみてください（笑）！

1..前兆だった??

いつから私は堕ちていったのか…。いつになったら普通に恋が出来るのか…。毎日、そんなことばかりを考えている。

高校生になるまで“彼氏”なんていなかった。別に欲しいとも思っていないかったから、焦ることもしなかった。友達と遊ぶ方が楽しいと思っていた。

初めての彼氏は、高一の春。紹介で知り合った人だ。違う高校の同い年の人。しかし1回デートしただけなのに、付き合って3日で“ウザい”と思うようになり、ふった。なぜウザかったのかは、今も分からない。ただ、飽きたのだ。

二人目は、高一の夏。同じ高校の同級生。彼はいわゆる“優等生”で、成績も優秀だった。

出会いは高校入試の時。体調が悪くなり、保健室で受験することになったのだが、先に保健室受験をしていたのが彼だった。

この出会いをお互い覚えていた。“運命”だと思った私は、告白を快諾した。しかし付き合ってから、学校で会ってもめったに喋らない。デートは、1回ショッピングセンターに行っただけ。彼は手を繋ぐこともしなかった。

“ただのメル友と変わらない”と思い、3ヵ月が過ぎたある日、ふった。

三人目も、同じ高校の同級生。二年の時だ（いつだったかは覚えていない）。彼は元初代ヘッドだったらしい。“プレイボーイ”だったが、付き合ってからそんなことをしなかった。

自転車で2ケツをして、私の家に行った。親が帰ってくるまでのほ

んの数時間を過ごした。その時、初めてキスをした。そして体を触られた。しかし、エッチは拒んだ。まだやりたくなかったから。

彼と学校帰りに会う約束をしていたある日、時間になっても連絡がなかった。メールをしても返ってこない。私は仕方なく家に帰った。約束の時間からしばらく経ち、突然ケータイが鳴った。彼からの電話だ。急いで出た。

「もしもし？」

何やら騒がしい。

「もしもし？」

返事がないので切った。1分と経たないうちに再び鳴った。

「もしもし？」

すると女の子の声で、

「もう連絡しないでくれる？」

：私はすぐに状況を理解した。彼は新しい彼女を作ったのだ。多分、エッチを拒んだからだ。私は、

「うん、分かった。じゃあバイバイ」

と、意外とあっさり答えた。ふられたのに、泣くことも悔しがることもなかった。むしろ、すっきりした。3ヵ月間の重荷が降りたかのように。

数日後、彼からメールが来た。“なんかゴメンね。こんな男、どうよ？”…意味分かんない。私は“さあね”とだけ返した。連絡が来ることはもうなかった。

それからは、恋愛なんてしないで過ごしていた。焦らなかった。だって、欲しいと思って作るものじゃないし、大学に行けば“年上”との出会いがあるし。

人を愛すること・人に愛されることを知らないまま、高校を卒業した。

そして、無事に大学生になった。この時はまだ、まさか自分がこん

な人生を歩むなんて思いもしなかった。

2..浮気相手

大学生になり、友達とサークルに入った。1年生4人と2年生の先輩1人でチームを作り、1年生の初作品を作るようになった。私のチームは男の先輩が担当になった。先輩の連絡先をみんなで教えてもらった。私は家に帰ってからメールをした。返事が来て、たわいもないメールをしかけた。

次の日、友達との間で先輩の話が出た。私が何通かメールをしたことを言くと、うらやましがった。みんなはただ“お願いします”“こちらこそヨロシクね”みたいなメールだけだったらしい。

数日後、メールで先輩と恋バナをしていた。だんだんふざけ合うようになり、“好きだよ”“私も好きですよ”みたいな会話になった。

すると突然、“付き合おうか”と言われた。まんざらでもなかった私は、嬉しかった。もちろん、すぐにOKした。しかしその後、“ありがとう。でも、言わなきゃいけないことがあるんだ”というメールが来た。何だろうと思ったが、“こんな深夜には話せないからまた今度ね”と言われてしまった。確かに私も眠かったので、メールを終えた。

次の日、メールで話の続きをした。そこで“実は彼女が居るんだ”と言われた。頭が混乱した。だって、彼女は居ないって言ってたから。：“彼女居ないって言ってたじゃないですかあ”と聞いたたら、彼は“みんなにはまだ言ってないけど、元カノとよりを戻したんだ”と答えた。それでも私が好きだと言った。“じゃあ私はどうすればいいんですか!?”と聞いたら、“自分でも分からない”と言われた。直接会って話すことになった。ちなみに彼女と言うのは、同じサークルの2年生の先輩だ。正直、彼氏が居るとは思えない人物である。

当日、泣きそうになるのを堪えながら電車で彼のアパートに向かっ

た。一人暮らしの男にぴったりな、おんぼろアパートだった。だが、中はA型の彼らしくすっきりしていた。

そして、2人で話した。彼は

「好きだよ。でも、やっぱりどっちかに決められない。」

とだけ答えた。そして、キスされた。嬉しかったけど、相手には彼女が居る：複雑なキスだった。

数時間後、なんと彼女と男友達（この人もまたサークルの先輩）が来て、なぜか4人で話し合うことになった。彼女は、今までもらった思い出の品を持参して、別れてもいいように来た。

先輩が彼に、

「お前はもうしたいんだ!？」

と聞いた。彼は

「どっちも好き」

とだけ答えた。彼女は

「あなたが決めることだから」

と言った。私は

「彼が好き。彼が告ってきたんだし。でも、最終的に決めるのは彼だから」

と言った。

結局、私はふられることになった。先輩と彼女は一旦出ていき、再び2人きりになった。涙を流す私を見て、彼は

「ゴメンね。でも、彼女の方が付き合い長いし。俺、高校の時に彼女にふられて凄いショックで。だから、今の彼女をふることは出来ないんだ。」

と言った。私は

「あなたから告白してきたのに：意味分かんないよ」と涙を流しながら答えた。

ふと時計を見ると、出て行かなきゃいけない時間だった。バイトに行かなきゃいけないのだ。ろくに話さないまま、私はそそくさと出て行った。バイト中、彼からメールが来た。“本当にゴメンね。ま

た家に遊びに来てね”と言われた。私は強がって“気にしないでください。ぜひ行きます”と返した。

なにげなく送ったメールだったが、数日後、本当に家に遊びに行ってしまった。あの日急に帰ってしまったのを、ちゃんと謝りたかったからだ。

彼は笑顔で迎えてくれた。そして私はちゃんと謝った。もちろん、彼も謝ってくれた。その後

「やっぱり好きだ」

と言われた。

私もまだ彼のことが好きだった。初めて心から好きだと思った相手だった。「うん、いいよ」

と一言答えた。ここからが、おかしい恋愛遍歴の始まりだった。

彼から聞いた話だが、男の先輩たちの間で、1年生の女の子で誰と付き合いたいか、勝手にランキングをつけていたらしい(笑)。私が一番だった。今まで“モテる”ことはなかったから、恥ずかしかったが、彼は自分のことのように嬉しかったと言ってくれた。

毎日メールもしたし、たまに学校帰りに彼の家でのんびりすることもあった。デートもしたし、お泊まりもした。私はまだ処女で、痛かった。私が痛がると優しい彼は、すぐに止めた。なかなか処女から進むことはなかったが、それでも彼は愛してくれた。代わりにたくさんのキスをくれた。

しかしたまに、夜中に彼が寝静まったのを見て、布団からこっそり出て一人で泣いたこともあった。布団に戻った私に気付いた彼は、優しく抱き締めてくれた。

ある日彼が弱っていたので、どうしたのか尋ねると、「彼女が妊娠した。」

そんなこと言われても、私も困る。たまたまゴムが破れてしまったらしい。

「私は味方だから。慰めてあげるから。」

そう言ってあげることしか出来なかった。私も辛かったが、さすがに友達にすら相談出来なかった。

苦しい思いをすることもあったが、“私を好きでいてくれれば、浮気相手でもいいや”：そう思っていた。

大学生になって初めての夏休みも終わりになる頃、サークルでキャンプがあった。彼は実家に帰っていたので来なかったが、私は楽しんだ。たまには悩まない日もほしい。

そんなキャンプで出会いは訪れた。最近入部した2年上の先輩が居るのだが、意気投合して仲良くなった。夜が更けるまで、2人で一つの敷布団でヒソヒソと語り合った。空が明るくなるまで。私が眠くなり、ようやく別れた。

浮気相手を始めて3カ月が経った。“一番になりたい”とワガママを願うようになった。それでも、彼の前では決して口にしなかった。心を許した友達の前でしか言わなかった。

彼は良く言えば優しい。悪く言えば優柔不断である。だからどっちもふれないことぐらい分かってる。

私が悩み出したある日、友達が

「（キャンプで仲良くなった）先輩に相談してみたら？男側の意見も聞いたら何かアドバイスもらえるかもよ」

と言い出した。私は素直に受け止め、友達と2人で先輩の家に行った。そして、私と彼のことを話した。先輩は

「何でそんなことしてるの。そんな男とは別れた方がいい。優しさとは違うよ。」

と言ってくれた。私は泣いた。そして、その場で彼にメールで別れを告げた。“辛いから、距離を置きたい”と。まだ好きだったから、別れたいとは言えない。初めて本気で好きになった相手に、今の私

が言える精一杯の言葉だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2584b/>

黒い恋

2010年10月20日20時01分発行